

尊攘の志士 大貫慎介・多介兄弟

万延元年（1860）、水戸藩を大きく揺るがした桜田門外の変では、藩士だけでなく表舞台に名を残さなかった多数の農民も関わっていました。その一人、西塩子村の大貫多介とその兄慎介を紹介します。

◇高橋多一郎を支援した大貫多介



▲大貫家墓所（西塩子区）

墓碑によれば、大貫多介（右馬之允）は天保5年（1834）、西塩子村庄屋大貫理兵衛の次男として西塩子村に生まれました。母は綿引氏の出身です。野口郷校時雍館に学び尊王攘夷運動に身を投じた兄の慎介に影響を受け、9代藩主斉昭の改革政治を支持して活動しました。桜田門外の変の計画と指導にあたった高橋多一郎（柚門）を敬愛し教えを受け、高橋の一字をもらって名を「多介」と称しました。高橋父子は井伊大老暗殺が決行された後、大坂に潜伏していたところを発見され四天王寺で自害。高橋と行動を共にしていた多介も捕縛され、江戸伝馬町の獄舎で27歳で死去しました。

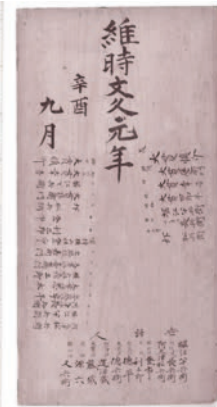
◇西塩子村の政治を担った兄・慎介

兄の慎介は大貫理兵衛の長子で、野口郷校時雍館に学びました。斉昭が進めた藩政改革を支持して村政にあたり、安政2年（1855）には小場村の安藤幾平らとともに「義民郷土」（改革に協力した農民に与えられた特別な身分）に取り立てられ、一代限り苗字帯刀を許されました。同じく郷土だった野口村の富商・関沢源次衛門の日記には大貫慎介が「西慎」（西塩子村大貫慎介の略記）として相談事や病氣見舞い等頻繁に登場し、親密な交流があったことがわかります。

安政5年に幕府が朝廷の許しを得ないまま日米修好通商条約に調印（無効許調印）すると斉昭は抗議のため不時登城し、これが原因で幕府から謹慎を命じられます。この処分を不服とした改革派農民たちが江戸を目指して水戸道中に押し出した雪冤騒動（小金屯集）にも慎介は参加し、地域における尊王攘夷運動の核となり活動しました。

元治元年（1864）の天狗党の筑波拳兵、続く

那珂湊の戦いに大発勢の一員として参加するも敗北し投降、関宿藩預りとなりました。この頃天狗勢で指導的な役割を果たした者や有力な家は諸生派の打ちこわしの対象となりました。同年8月には東野村綿引家、上小瀬村井樋家、高部村国松家などともに大貫慎介宅も襲われ、改革派の拠点となっていた野口郷校も焼き打ちされました。しかし慶応3年（1867）、大政奉還を経て幕府が崩壊すると後ろ盾を失った諸生派も衰退し、改革派が地位を回復し村政にも復帰していきます。慶応4年3月には大貫慎介は山横目に復帰しました。西塩子村の鎮守羽黒鹿島神社には、慎介と父理兵衛が庄屋を務めた時代の棟札がそれぞれ奉納されています。



▲大貫慎介の名のある文久元年銘棟札（羽黒鹿島神社蔵）

明治4年（1871）旧村を解体して新たな行政区を設定した大区小区制と戸籍法のもとで、西塩子村は第十大区一小区となり、大貫慎介は同大区戸長と同小区副戸長を務め、壬申戸籍の編成に従事しています。戸長のほかに地券取調係も務めており、明治時代の西塩子村と周辺地域の村政を担っていました。この頃慎介は「直」と改名したと考えられ、明治25年6月に71歳で没したことが墓碑から判明します。

長男の一（1854-1902）は明治22年に誕生した塩田村の初代村長となり、死去の直前まで在職しました。その間に茨城県会議員を二期務め、森林行政、開墾問題に取り組みました。

坏文也さん、木村宏さん、宇留野美雪さんに調査にご協力いただきました。

【参考文献】木村宏「桜田門外の変余録」『大宮郷土研究』14号2010年、野上平（講演資料）「関沢家日記から読みとく幕末維新期の常陸大宮地方」2020、『大宮町史』昭和33年

■問い合わせ■ 文書館 ☎52-0571